

経 営

経営に関する最近の研究テーマはこれまでの企業経営に関するものに加え、カラマツ材の流通や利用など林業・林産業の両分野にまたがる問題や消費者ニーズの多様化に対応した新製品の開発および経済性の検討があげられます。

最近10年間の主な研究の内容と成果は以下のとおりです。

製材業の経営

戦後における製材技術の進展とそれともなう企業経営の変化の実態を明らかにし、「中小企業の経営指標」に基づいて木材工業の収益性、安定性、成長性について他業種と比較しながら現状分析を行いました。

最近の研究としては、マイコンによる製材業の生産管理というテーマで、生産・在庫管理などの合理化を進めるためのバーコードシステムの確立とそのためのソフト開発を行いました。

開発製品・技術の原価試算

試験場の研究の成果としていくつかの新製品新技術が開発されています。これらを民間企業に移転するには、コストの検討が必要になります。昭和55年以降、円柱材を用いたログハウス、LVLおよび乾燥設備（ソーラ型、IF型、低温除湿型）などを対象に原価計算を行っています。

カラマツ材の生産予測と高度利用

本道のカラマツ資源は、年齢構成が著しく偏っているため、将来的な安定供給に疑問が持たれています。そこで、素材生産の平準化を図る一つの手がかりとして、道立林業試験場が作成したカラマツ人工林の林分成長モデルを使い、地位指数に応じ伐期齢を40、50、60年とした場合の径級別出



市場開拓の可能性の高い屋外デッキ

材量を予測しました。

利用の面では、中大径材の価値をいかに高めるかが重要な課題となっています。製材試験の結果から、優良な原木であれば付加価値の高い建築材や家具材への利用が十分に可能であるとの見通しを得ました。カラマツの強度、適度な硬さを生かしてデッキ材としての利用試験も行っています。このほか、大径材を用いた価値の高い製品としてカラマツ化粧用合板を設定し、梱包材など従来の製材中心の場合の素材価格との比較を行った結果、多少手間がかかっても枝打ちを行い無節の化粧合板用素材を生産した方が、トータルの収入は良いとの結論を得ました。

道産広葉樹材の流通と利用

昭和55年から56年にかけて、広葉樹材の集積地旭川市の製材工場や家具工場において優良材を中心に利用実態調査を行い、原木の量・質がともに低下の傾向にあることを明らかにしました。

昭和60年代に入ってから、研究の対象が低質・未利用広葉樹材に移りました。ミズナラバルブ材を用いて製造した集成ブロック、木タイルについては、意匠性が高く、経済的な検討結果からも市場性があるとの見通しを得ました。

今後は、開発した製品・技術を効率的に企業へ移転するため、市場性の調査を行うとともに製造コストの低減化に向けた検討を進めます。またカラマツや低質・未利用広葉樹の流通と利用など行政の施策や業界の要望を反映した課題に積極的に取り組んでいきます。（経営科 米田 昌世）